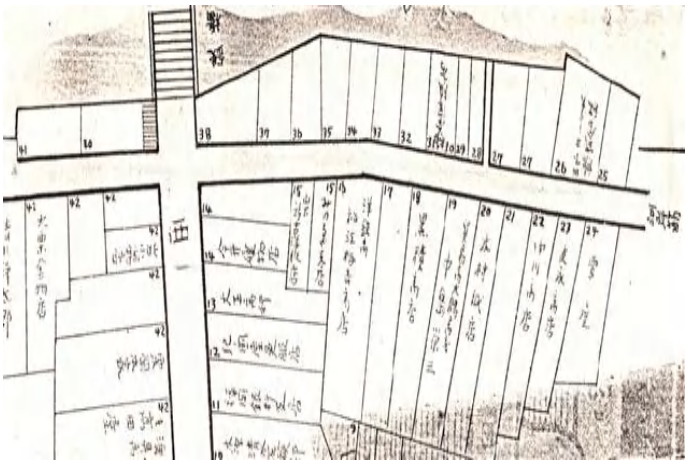
Ⅰ．長崎時代の梅屋庄吉（その２）

―庄吉が駆け抜けた当時の長崎―

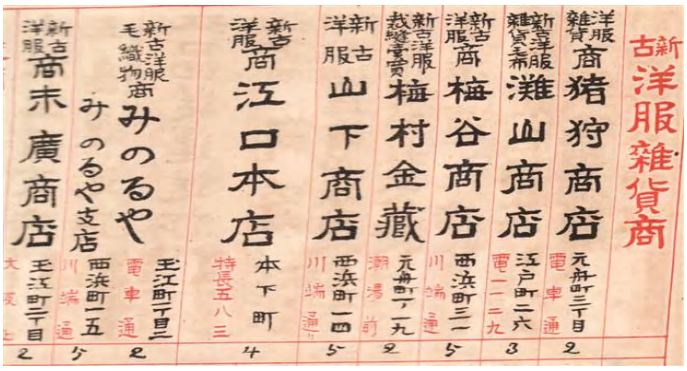
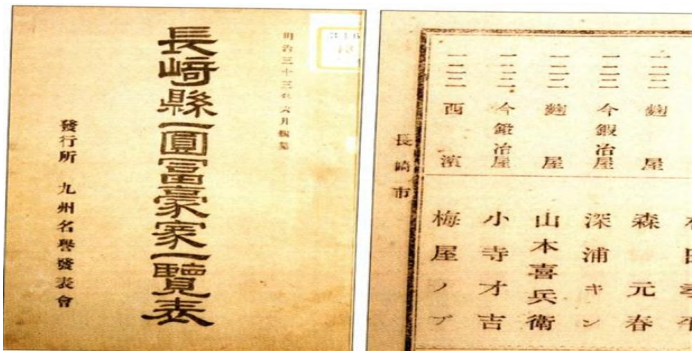
長崎史談会幹事　村崎春樹

梅屋商店があった西浜町について

前回掲載した梅屋商店があった西浜町川端通りのなかで、松江洋鉄店について「松江梅吉商店」ではないとの指摘がありましたので、今回は、その根拠の説明を含め、明治から大正初期の長崎西浜町川端通りの街並みを改めて紹介いたします。まず、参考とした資料は、長崎県立図書館所蔵の大正8年7月鎮西精図社発行の『長崎市地番入分割図』です。当時の西浜町川端通りは鉄橋(くろがねばし)から中島川の川上方向へ川



沿いに14軒（西浜町38番地～25番地）の商家が並び28番地と27番地の間に川へ降りる露地があった。また、2.7メートルほどの通路（現在の電車軌道の浜町よりの車道）を挟んで14番地～24番地12軒の商家が軒を並べていた。14番地には増山理髪店、15番地は山下新吉洋服店と洋服商みのる支店、16番地に洋鉄商「松江梅吉商店」（上記長崎市地番入分割図に明記され、また長崎・浜市連合商店連合会発行「長崎浜の町繁盛記」にも洋鉄商松江梅吉商店とあるので「松江梅吉商店」と記載したが、明治33年長崎県一圓富豪家一覧21位以降に西浜町に松江乙一氏の名前があり、今後調査が必要である）、18番地「黒積商店」、19番地「貿易商大鶴商店中島栄三」、20番地「木村紙店」、21番地「大津商店」、22番地「中川商店」、23番地「友永商店」、24番地「雪屋」、通りを挟んで鉄橋(くろがねばし)際38番地「田中テグス屋」、37番地「高田米屋」、31番地と30番地に洋服店「梅谷商店」があった。26番地には「山下コークス株式会社」が記載されていた。



上記新古洋服雑貨商の欄（大正8年）に「梅谷商店」が見えるが、これは明治36年（1898）梅屋庄吉の養母ノブが他界後、庄吉の妻トクが梅屋商店を番頭夫婦にまかせ、香港に渡りたのち、番頭夫婦が洋服屋を開業したもので、川端通りが電車通りになるまで、梅谷商店として営業をつづけていたものです。それまで、梅屋庄吉の妻トクは、庄吉の留守を守り、明治33年（1900）には「長崎県一圓富豪家一覧表」で年所得300円で記載されている。（つづく）